

# 命日、そして誕生日



ジエイ・コスモ株

社長

大島修治

おおしましゅうじ

真の感謝力は逆境の中でしか生まれえないと思うが、その逆境にも個人差がある。人は誰もその人に相応しい出来事に遭遇するようだ。私の逆境はその傲慢な性格が引き寄せた。

一九九六年四十八歳の夏、私は暴漢にガソリンを浴びせられ火だるまになって、救急病院に運び込まれた。意識朦朧の私に医師は「あなたはまず助からないと思ってください」と告げた。全身の六割の大火傷で移植するにも皮膚が足りず助かる見込みは皆無と思われた。それでも医師は懸命に尽くしてくださった。五度の危篤状態、十数回の移植手術、体は三倍くらいに腫れ上がった。

火傷治療は包帯を解き消毒するときから激痛が走る。熱湯消毒のときなどは金属タワシで体を削られるような地獄の痛み。時には耐えられずに気絶することさえあった。その痛みを抑えるのにモルヒネを使い、副作用でひどい幻覚症状。自棄状態となり前途を悲観して、何度か自殺を試みた。だが両手の指は、首をくりたくても紐も持てない。傷の壊疽が進行し、やむなく右腕切断の大手術に妻が同意した。命を救うため他に選択はなかった。

しかし奇跡がおきた。手術の前日に医師に懇願して老父母が見舞いに来てくれた。「あなたがどんな体になっても生きてさえいてくれたら、母さんはもう一人子供を産んだと思ってどんなお世話でもするからね。がんばってよ」。七十四歳の母親の一言が、私の命の灯りに火をつけた。自暴自棄の私から自死の思いは消えていった。自分なりに親孝行を尽くしてきたつもりだった。しかし親より早く逝くほど親不孝はない。涙がとまらなかった。

その後も試練は続いたが右手右足の切断は免れた。そして当時中学生の息子二人が、皮膚をくれた。私の右手は息子たちにもらったものだ。失った右手指には自分の右足親指を移植した。今、握手がとっても楽しい。「出愛」が楽しい。苦悶を通して今は「生」の歓びを感じている。毎朝、目覚めたことに感謝して合掌する。

命日、そして誕生日。新しい命に感謝してやまない。火傷を癒せた温泉に感謝して、社員たちとバリアフリー温泉建設の目標に向かっている。人は一言で命を救われることがある。できれば母のように慈愛に満ちた言葉で人の心を燃やせればうれしいと思っている。